付録ゲーム歴史概説

ヴェリキエ・ルキから来た男

文／野上 靖

「旅人よ、ゲルマニアの国びとに、ゆきて伝えよ。総統の命のまま、我らここに死にきと」

1943年1月30日夜 ナチ政権掌握10周年記念大会において、スターリングラードを始めとする1942～43年の赤軍冬季反攻の籠城戦で倒れたドイツ軍将兵に哀悼の意を表してのヘルマン・ゲーリングのラジオ演説より

■湿原の要塞ヴェリキエ・ルキ

ドイツ北方軍集団と中央軍集団との繋ぎ目に位置する小都市ヴェリキエ・ルキは、地味の痩せた湿原地帯にありながら、東欧からモスクワに至る鉄道線路がロシア広軌に切り替わる転換点であり、またレニングラードの包囲を続ける北方軍集団の命運を握る南北縦断鉄道線上にあるノヴォ・ソコルニキを守る楯として、1941年8月の独軍占領以来両軍の焦点となってきた。

41年末の赤軍冬季反攻でも赤軍の戦略目標にされたヴェリキエ・ルキだけに、独軍は着々と要塞化を進め、包囲に備えて弾薬・糧食の備蓄まで行われた。更に42年晩秋には、来たるべき赤軍冬季反攻はヴェリキエ・ルキからスモレンスクにかけて行われるだろうという、ゲーレン大佐率いる陸軍諜報部の誤った情勢判断に振り回された総統が、マンシュタイン元帥の第11軍と新編間もない独空軍第2野戦軍団とをこの戦区に投入し、あまつさえ攻勢転移の企図さえ抱いていたが、スターリングラードの危機を受け、急遽第11軍は戦線から引き抜かれてロシア南部へと移送され、その穴埋めも未了のままに赤軍攻勢にさらされる事となった。

これに対して赤軍は、ジューコフの肝煎りで行われる、ルジェフからヴィヤジマ奪回を目指す「マース」作戦に連動し、モスクワからルジェフを経てヴェリキエ・ルキに至る鉄道線の解放と、究極的にはノヴォ・ソコルニキを経てスモレンスクへと南方転回して中央軍集団を、またリガ湾へも突進して北方軍集団をも包囲殲滅するという、狂気の沙汰とは言わないまでも超級の冒険的企図を秘めていた。

確かにマンシュタインが去った後のヴェリキエ・ルキ戦線は、クルト・フォン・デア・シュヴァレリー大将の率いるシュヴァレリー軍団（第59軍団の残り滓）と信頼性皆無の空軍第2野戦軍団しかおらず、特にヴェリキエ・ルキ担当の第83歩兵師団の防衛ラインは総延長125キロにも及ぶ過重極まりないものであった。しかしここを攻める赤軍カリーニン方面軍も、信頼性の高い精鋭部隊の多くを東方のマース作戦に割かれ、ヴェリキエ・ルキ攻勢を主導する第3打撃軍の師団の殆どが一度全滅して再編成されたばかりという戦力未知数の部隊から成っていた。

■冬の危機、再び

本来スターリングラードの独軍を逆包囲するウラヌス作戦と、ルジェフ・ヴィヤジマ奪回を目指すマース作戦への支援の意も込めて先発するはずだったヴェリキエ・ルキ反攻だが、気温が上昇して泥濘となり地表の凍結を待つ間にウラヌス作戦が開始され、結局攻撃が発動されたのはマース作戦発動の前日11月24日になってからだった。それでも、もともと湿地帯で人家もまばらな荒野である上に、極寒の冬は守備兵も暖を求めて居住区に引き籠もりがちであり、赤軍の快速スキー部隊や戦車旅団による電撃的侵攻を押し止める余裕はなかった。ヴェリキエ・ルキ郊外東側の小川沿いに薄い防衛線を敷く独軍はたちまち蹂躙され、攻勢開始翌日にはヴェリキエ・ルキ市街に対する威力偵察が行われた。

26日になると態勢を整えた本格的な市街地攻撃が行われたが、多数のロケット砲や対空機関砲を擁しハリネズミ陣を敷く守備隊の防御射撃によって、大損害を被って敗退。翌27日には赤軍第357歩兵師団によってヴェリキエ・ルキの完全包囲が成ったが、赤軍主力はノヴォ・ソコルニキのある西方へと進撃を続け、ヴェリキエ・ルキは以後、進撃に追随できない赤軍砲兵群による熾烈な砲撃に終始さらされる事となった。

一方ヴェリキエ・ルキを迂回して西方へと突進した赤軍は、28日の昼にはノヴォ・ソコルニキ南方で南北鉄道の遮断に成功。11月初旬に第83歩兵師団の師団長に就任したシェーラー中将（41～42年の「冬の危機」に際してヴェリキエ・ルキ北方ホルム包囲陣を1ヶ月半死守し、総統から騎士十字章を授与された英雄）は、より緊急性の高いノヴォ・ソコルニキと南北鉄道の防衛に全力を傾注する事に決心し、ヴェリキエ・ルキへの手当は断念せざるを得なくなった。しかしシェーラー中将の83師団は、その1個連隊と多くの砲兵をヴェリキエ・ルキ守備隊として割いており、残る2個連隊と第3山岳猟兵師団（実質1個連隊）は、ヴェリキエ・ルキ東方の最前線から潰走してきたばかりで今だ再編成の途中であり、唯一の頼みは大兵站基地でもあったノヴォ・ソコルニキ駅周辺にたむろする緇重兵や帰休兵、訓練兵らを掻き集めた臨時編成部隊であった。

既に東方ではルジェフ突出部に対するマース大作戦が開始され、中央軍集団の機動予備はそちらに注がれており、また総統司令部もスターリングラード方面の火消しに忙殺されて、ヴェリキエ・ルキへは（今のところ平穏な）

北方軍集団から数個師団を抽出して派遣するよう命じたに過ぎなかった。そして抽出を命じられた北方軍集団が渋々手放したのは、たった32輌しか戦車を持たず、しかもその内27輌が旧式然としたチェコ（Cz38t）戦車という、北方軍集団最貧の第8装甲師団と第20自動車化歩兵師団、そしてマンシュタインの置き土産（南方移送の順番待ち）だった第291歩兵師団であった。また南隣の空軍第2野戦軍団から第6空軍野戦師団と、鉄道警備の任に就いていた第1SS自動車化歩兵旅団（1月に入ってSS突撃旅団RFSSと改名）を引き抜き、これらの増援を受けて軍団規模を上回った独軍は、中央軍集団参謀長のヴェーラー中将の下にヴェーラー臨時作戦集団を編成。南北からノヴォ・ソコルニキへ向けて、鉄道上に居座る赤軍の撃退作戦を開始した。一時は南北縦断鉄道を支配したかに見えた赤軍も、鉄道／街道の交差点であるヴェリキエ・ルキから先へ補給線を延ばせない為に砲兵の支援を欠き、戦車の燃料にも事欠く有様で、本来劣弱な空軍野戦師団や寄せ集めのSS戦闘団相手にも後退を余儀なくされた。

かくして12月初頭にはノヴォ・ソコルニキ以南の線路上から赤軍の脅威が一掃され、12月12日までには第8装甲師団と第291歩兵師団とがゴルキ（今号付録ヘクス1623）から東方10キロの地点まで赤軍を追い払い、これを受けて赤軍は14日にノヴォ・ソコルニキ方面への攻勢を断念し、ヴェリキエ・ルキの奪回に全力を振り向ける方針へと転換した。

ノヴォ・ソコルニキと南北鉄道の安定を取り戻したヴェーラー作戦集団は、クリスマスにはヴェリキエ・ルキ守備隊を救出できるよう部隊の休養と準備に余念が無かった。

■頑張れ、ヴェリキエ・ルキ

西方で激戦が繰り広げられる中、ヴェリキエ・ルキは連日猛攻にさらされていた。市街に攻め寄せる赤軍は、砲兵と戦車の支援を受けていたものの、周到に準備された守備隊特火点から激しい防御射撃を受けて恐るべき損害を出していた。本格的な市街戦が開始された僅か3日目の11月30日には、親衛第21、46歩兵師団が被害甚大につき相次いで戦線から離脱。穴埋めとして投入された第249歩兵師団（エストニア人流刑囚で編成）に至っては、戦闘中に寝返って守備隊側に身を投ずる将兵が続出する始末であった（ヴェリキエ・ルキ守備隊には反共義勇エストニア人で編成された治安部隊があり、それが投降説得に力を発揮した）。しかし連日連夜の猛砲撃に守備隊側の損害も大きく、防衛線の維持に後方要員まで駆り出した為に、野戦病院で負傷兵の救護にあたっているのは寝返った元赤軍兵のエストニア人ばかりという状態だった。激しい市街戦は容赦なく守備隊を損耗させ、第343保安大隊など僅か3日で壊滅に瀕する有様で、こうした状況を受けて守備隊長のフライヘア・フォン・ザス中佐は次の電報を打電した。

12月15日付：守備隊長ザス中佐発
——敵に与うる損害大にして敵は戦慄の色濃く 特にエストニア人師団の戦意極めて減退せるも 我損傷また多く 兵器弾薬の損耗と共に日を追いて楽観を許さざるものあり しかれども一同士気旺盛 最後まで現在地確保を期しあり。

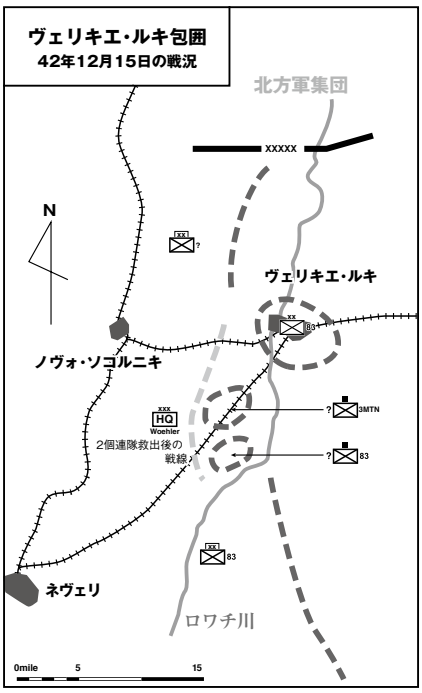
これを受け、総統より激励電報
——守備隊が忍苦を重ね難局に堪え 寡兵よく衆敵に対し健闘を続けつつあることは全軍賛仰の的にして 赤熱の闘魂に更に拍車し あくまで持久に徹し万策を尽くして救援部隊の到着を待つべし。

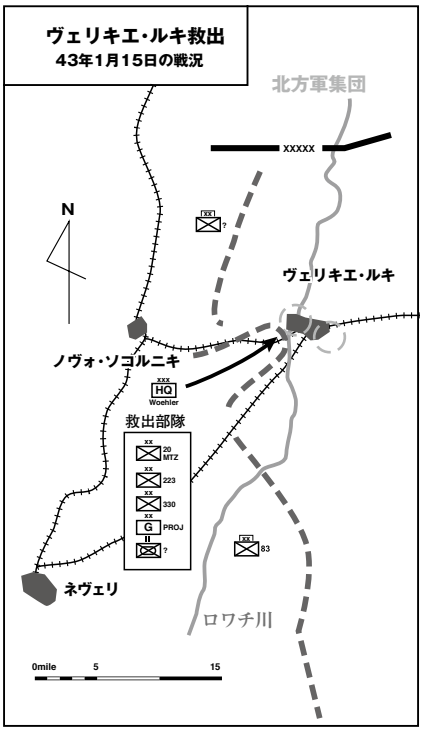
守備隊長ザス中佐より返電
——総統よりの報に接し 将兵一同元気百倍 ヴェリキエ・ルキはいかなる状況においてもこれを絶対確保して敵に甚大なる消耗を強要する拠点となし もって全戦局の快勝に寄与せんことを期す。

しかし救援を待望するヴェリキエ・ルキ守備隊に与えられたのは総統の激励と空中補給だけであった。スターリングラードと同様にここでもJu-52とHe-111による空中補給が行われたが、飛行場が無いヴェリキエ・ルキでは不確実な落下傘投下に頼る他なく、痺れを切らした空軍はグライダーに軽対戦車砲や戦闘工兵を載せて決死の増援を送り込む離れ業さえ演じた。これらによって確実に守備隊の延命には成功したが、貴重な輸送機80機以上が喪われた。

その頃、縦断鉄道の掃討を終えて着々と解囲の準備を進めるヴェーラー作戦集団は、ノヴォ・ソコルニキとヴェリキエ・ルキとの中間地点にあたる、グシュチノ（ヘクス2420）、チェルジノム（2818）のラインまで道路沿いに戦線を押し戻す事に成功していた。しかし突出した赤軍に与えた損害も大きかった反面、自軍の損害もまた大きく、押し返しを中止した12月18日の時点で、第20自動車化歩兵師団と第291歩兵師団とを合わせても6200人の兵員を数えるのみであり、第3山岳猟兵師団（の138連隊）に至っては反攻開始時に22人を数えた将校の内20人を喪い、また786人の兵員の内60人しか残っていなかった。

赤軍も攻囲戦で半壊した親衛第21、46師団に加えて、今や親衛第9、19歩兵師団の戦力まで見る影なく、第249エストニア師団は1100の遺棄死体を戦野に晒していた。ヴェリキエ・ルキ救出の為に更なる増援を切望するヴェーラー作戦集団だったが、より大規模なスターリングラードとルジェフの戦いに傾





注している独軍にまともな余力があるはずもなく、マンシュタインの置き土産から更に第205歩兵師団と戦車大隊1個（本隊はスターリングラード方面で戦闘中）が、東プロイセン駐屯の後備第331歩兵師団が真っ直ぐ鉄道移動で、挙げ句の果ては地中海マルタ島攻略の為に編成されたものの作戦中止によって中央軍集団の後方でブラついていた鹵獲ソ連戦車隊（T-34/76とKV-1で編成されたzbv.66第2中隊）まで掻き集められた。

かくしてクリスマス前に開始された最初の救出作戦は、ノヴォ・ソコルニキからヴェリキエ・ルキに通じる鉄道沿いに行われた。しかし独軍が解囲の準備を整えている間に赤軍も阻止線の強化に努めており、ロワチ川を押し渡った砲兵の攻勢粉砕射撃の効果もあって、ヴェーラー作戦集団の進撃はクリスマスイブにヴェリキエ・ルキの手前10キロの地点で停止を余儀なくされた。

この救出部隊の接近に焦った赤軍は、市街地への浸食を強め、大晦日には遂にロワチ川の西岸と東岸とで守備隊は分断された。結合力を失った守備隊の衰えは明らかで、救出部隊を指揮するヴェーラーに攻勢準備の余裕はなかった。

■孤軍重囲ヲ破ッテ退カントス

年が明けて1月4日、2回目の救出作戦が行われ、中世の城砦橋を陣地化した西岸のチタデレ特火点まであと4キロと迫ったが、劣弱な歩兵戦力に加え貧弱で少な過ぎる戦車兵力では、最後の阻止線を破る事ができなかった。その間にも次々と守備隊特火点は力尽き、備蓄食糧と医薬品も枯渇して、屠殺した僅かな馬肉が最後の栄養源となっていた。また絶え間ない砲爆撃と市街戦により死傷者と同居している地下壕では、赤痢と腸チフスの発生を抑える術はなかった。かくして内と外から守備隊の命運は尽きようとしていた。

それでもヴェーラー作戦集団は諦めてはいなかった。1月9日には3度目の解囲の試みとして「トーティラ」救出作戦（Totila：ビザンチン帝国の名将ベリサリウスを退けてイタリアを奪還した東ゴート（ゲルマン）族の王の名前）を発動した。救出部隊の先鋒はトリブカイト少佐率いる独立混成戦闘団。第18装甲師団第18装甲大隊、親部隊たる第11装甲師団は南ロシアのチル河で戦闘中という第15装甲連隊第1大隊の戦車5輌、第8装甲師団の装甲兵員輸送車数台で編成されたトリブカイト戦隊は吹雪をついて突破前進し、遂にチタデレ特火点の中庭へと滑り込んだ。包囲以来1ヶ月と12日、遂に邂逅した将兵はお互いに手を取り合って、男泣きに泣いた。髭に覆われ、硝煙に焼け焦げたその顔には、生存への希望が笑みとなって浮かんでいた。しかし非情にも突破に成功したのはトリブカイト戦隊だけであり、後続部隊は側面から赤軍戦車に襲われて防勢に転じていた。劣勢を悟ったトリブカイト少佐は反転脱出を命じたが、時すでに遅く瓦礫の間の一本道で次々に車輌が狙い撃ちされ、トリブカイト少佐以下生存者はチタデレ特火点の守備隊に加わって包囲下の人となった。

事ここに至りヴェーラー作戦集団は、最後の救出作戦を1月15日に定めた。今度の作戦はヴェリキエ・ルキの堅持が目的ではなく、ただ守備隊将兵の命を救う事にあった。その目的に従ってまずは1月10日の夜陰に乗じ、ブランデンブルグ特殊部隊のコマンド達が赤軍兵士よろしく、zbv.66第2中隊の鹵獲戦車に跨乗してチタデレ特火点への潜入に成功。これを受けて守備隊側も内側から血路を切り開くべく突破脱出部隊への編成替えを行った。かくして迎えた15日、嫌々ゲーリングが手放した第7降下猟兵師団の1個大隊（ベッカー大尉指揮）が先陣を切る解囲部隊と、これに呼応して突破脱出を図る守備隊側とで赤軍を挟撃したが、これを予期していた赤軍の守りは堅く、混乱に乗じて脱出を図ったダルネッデ大尉以下のチタデレ守備隊180人だけが友軍戦線に辿り着いた。

しかし赤軍だけでなくロワチ川という自然の障壁にも隔てられた、守備隊本部に立て籠もるザス中佐以下に救いの手が届く事はなかった。西方で響く戦闘騒音が沈静化するのを感じ取った中佐は、1月16日未明から一連の電報を発して以後消息を絶った。そしてそれはヴェリキエ・ルキの陥落を意味したのであった。

午前4時40分：守備隊長ザス中佐発
——2000余の負傷兵を残しての脱出困難にして解囲部隊に合するに至らず　我が陣地までの突破救出の企図なきや　至急返電ありたし。

午前7時20分：守備隊長ザス中佐発
——敵の攻撃は全面的に活発にして　戦車を伴う熾烈なる砲銃撃及び火焔攻撃をもって主陣地中枢に迫り　目下激闘中なり 至急救援乞う。

午前8時40分：守備隊長ザス中佐発最終電
——特に状況切迫陣地困難に至る　我が陣地を砲撃せられたし。

■独軍の戦術的勝利

結局ロワチ川東岸の守備隊から突破脱出に成功したのはベーネマン砲兵中尉率いる8人だけであり、60時間に及ぶ逃避行の末、友軍戦線に辿り着いた中尉の第一声は「ヴェリキエ・ルキから来た」であった。そしてヴェリキエ・ルキで捕虜となった独兵の内、戦後祖国への帰還を果たしたのは僅か11人に過ぎないという。

しかしヴェリキエ・ルキ戦区の独軍は1対5の劣勢にありながら、赤軍第3打撃軍の猛攻を跳ね返し、戦略目標たる南北縦断鉄道の遮断も断念させた。ヴェリキエ・ルキを守り抜く事こそできなかったが、第3打撃軍が被った損害は戦慄すべきものがあり、以後この戦区では1943年の夏に独軍が自発的に撤退するまで平穏な日々が続く事になる。　■